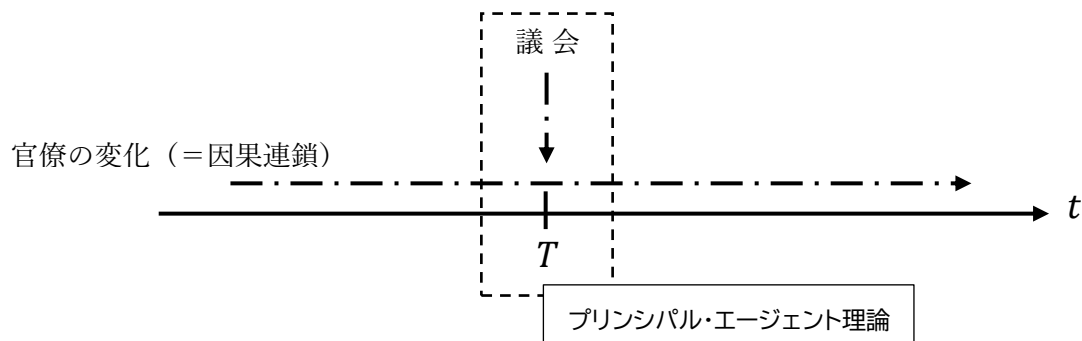


## 0. 「現代社会科学」の厨房

- 適切な変数（「食材」）と適切な測定（「調理法」）で調理する限り食材の組み合わせ方、組み合わせる順序、組み合わせしておく期間は「料理に違いを生みことはない」  
⇒現代社会科学は現在においてどの「変数」が重要な政治的帰結を導くのかという問いが中心で時間的な観点がない。「動画」ではなく「静止画」として見ている。（ $f(x)$ ばかりで $f(x,t)$ の観点がないということか？）
- 時間的過程を考慮することの重要性を語る。
- 「歴史は重要である」という言葉を再考する：マルクスからシュンペーターまで多くの碩学が歴史について考えた  
⇒時間的過程を考えることにより、よりよく政治的帰結を説明できるだけでなく、本来見ていなかった帰結にも注目できる

## 1. 二つの研究例

- ダニエル・カーペンター/“*The forging of Bureaucratic Autonomy*”: 「因果連鎖」に着目  
議会が彼らの選好に合うように官僚を動かせるほどの力を持っている、というプリンシパル・エージェント理論を批判。本来は長期的な因果連鎖として理解されるべきもののある時点の断面図としてしか見ていないために官僚の自立性を過小評価してしまった。（下のイメージ？）先の例でいえば $f(x, t = T)$ から $f(x, t)$ への展開に近い(かも)。



- トマス・アートマン/“*The Birth of Leviathan*”: 経路依存・配列・緩慢に推移する過程に着目  
ヨーロッパの国家発展において各国が異なる時期に激しい軍事的衝突を経験したことが、国ごとの国民国家構造の違いに大きな影響を及ぼしたことを指摘。（大きな予算が必要な戦争が勃発した場合、識字率の違い（時代に強く依存）が徴税、それに続く官僚制度の違いを生んだ）大雑把に言えば諸要素は可換

ではないということ。(下の図のイメージ)

	$t = T_1$	$t = T_2$	結果
国家①	A	B	$A \times B$
国家②	B	A	$B \times A$

※A と B は可換性が保証されていない！ (ex:行列・写像)

## 2. 社会科学の「歴史への転回」

- 3つの有力な「歴史への転回」

- ① 「過去に関する研究としての歴史」: 特定の歴史的事象・過程を分析し、説得力のある因果的 s 説明を行う。他の研究とのつながりにあまり注目しない。(歴史家に近い) 彼らは歴史研究が現代を理解するのに有用である、と想定しているがそれは必ずしも自明ではない。
- ② 「実例の素材探しとしての歴史」: あるモデルに当てはまるような実例があることを示すために歴史に注目する。だからといって歴史的次元については無関心。
- ③ 「さらに多くの事例を得るための場としての歴史」: データの情報源、現在の状況では見出しにくい現象についての情報源となる。(②が演繹的な推論から事例を探すのに対して③は帰納的・統計的な考え方に近い)

⇒歴史と社会科学をつなげるものは時間的次元を持った理論 (関数のアナロジーでいえば②・③はいかにして $f(\mathbf{x})$ を探すかであり、①はそもそも $f(\mathbf{x})$ を仮定しない。筆者は $f(\mathbf{x})$ を $f(\mathbf{x}, t)$ に拡張することを提案し、①を $f(\mathbf{x}, t = T)$ として解釈することで「つなげる」といっているのか)

- 「歴史は重要である」を再考する

⇒「時間的次元を検討する」=歴史への転回は必ずしも自明ではない。

⇒経路依存・重大局面・配列・事象…断片的に語られてきたが、時間的次元が重要であると理論的に明確にしたい

- 一般理論とメカニズム

⇒歴史指向の研究者は政治の一般理論(法則)を生み出すことに懐疑的。社会科学者は限定的な一般化はできると考えている。この「限定的な一般化」=メカニズム

⇒時間的次元を備えたメカニズムは両者の橋渡しになる。このメカニズムは社会科学と伝統的な手法(≡歴史研究)において、どこが得意でどこが苦手かを浮き彫りにし、新たな問い・帰結を生み出す。両者の対話もしやすくなる。(社会科学が蛸壺化している)

⇒本書は方法論の本ではないが、どのような理論を選択するか( $f(\mathbf{x})$  or  $f(\mathbf{x}, t)$ のどちらをとるか)は方法論と密接にかかわっているため、方法論の議論とも関連している

- 「合理的制度論」と「歴史的制度論」

⇒両者は明確に区別されるわけではないが、(なんとなく)対立している。筆者としては橋渡しをしたい。「理論的心象」。

⇒「歴史的制度論」: 名前の割には制度的側面(憲法や政策決定過程の構造)にばかり注目していて歴史的側面は不明確だった。彼らの「歴史への転回」は単に方法論的な意味合いが強い。彼らは時間的次元の議論に「粘着性」やタイミング、配列といった考えを提供する。

⇒「合理的制度論」: 本書の議論において合理的に行動するアクター間の戦略的相互作用について語ることが多い。これは「合理的制度論」の議論から得るところが多い。ただ、時間的・空間的に制限されているために、時間的な要素を無視してしまう短所がある。だからといって「合理的制度論」のもつ前提が間違っていると批判したいわけではない。

⇒「モデルにできるよ」: 時間的次元の議論を「合理的制度論」は扱えるというが、実際運用上は扱わないことが多くそれは扱えないことと同じである(?)。

### 3. 分析の基盤

- 1章: 経路依存

⇒経路依存: 「初期段階での比較的小さな摂動の影響を受けてその後に複数から帰結が生じる可能性があるが、ひとたび特定の経路が定まれば自己強化過程から方向転換することは非常にむずかしくなる」

⇒社会に慣性や「粘着性」があること、ゆえに初期条件が重要であることを示す。ある事象・過程が引き金を引いて起きた力学はそれが再起しなくても再生産される。(この点は物理における慣性と同じ)

- 2章: タイミングと配列

⇒「結合」に関する議論。 $A \cap B$ と $A \cup B$ は違うという話(多分)「結合」は複数の事例を説明するのにはあまり役立たない。ある帰結を事後的に理解するには有益であるが、多様な状況に適應できるメカニズムの理解には有用ではない。

⇒上記は配列論ではあまり問題にならない。配列論は主に正のフィードバックとかかわっている。時間的に先行するある事象は、時間的に後の事象における選択肢を制限する。ゆえに事象の配列は帰結に大きな影響を表す。

⇒配列の問題は不可逆性とかかわっている。大規模な社会変動の影響を考察するときに用いられる。

- 3章: 長期にわたって展開する様々な因果的過程とその帰結

⇒ある要素が漸進的にゆっくりと進行する場合もあるし、閾値がある(ある一定量を超えないと発揮しない)場合もあるし、重要な要素の出現と帰結の間の時間的な開きが大きい場合もある。これらを見落す/切り捨てると因果推論を間違える可能性がある。

- 4章～5章：「アクター中心機能主義」の問題

⇒制度選択の長期的効果はアクターの目標の具体的な表れではなく、社会過程の副産物。

⇒真に問いとすべきは、制度選択の問題ではなく、制度発展の問題。即ち制度選択の瞬間だけでなく、制度はなぜ変化しないのか（しにくいのか）という制度発展の問題に取り組むことでよりよく制度の帰結パターンを説明できる。

- 「歴史は重要」への筆者なりの答え

① 多くの社会過程には経路依存が生じている

② 配列が重油な社会現象の決定要因になりうる

③ 多くの重要な社会的原因・帰結は緩慢に推移するから

④ 制度の帰結の説明は制度選択の問題としてよりも制度発展の問題として設定する方が適切だから

### 疑問点・議論したい点（まだ序章しか読んでないけれど）

- $f(x, t)$ は連続関数だろうか？または「緩慢に変化する」というならば $f(x, t)$ は滑らかな関数だろうか？もしそうでないならば時間を長期的にみる必要はないかもしれないし、合理的制度論の想定する制限された空間・時間は妥当かもしれない。（c.f.コロナウイルス）  
⇒合理的制度論が制限された空間・時間しか見ていないとしても、彼らは彼らで必要十分な範囲を見ているのではないだろうか？
- 初めの「厨房」の話について、定量的研究も、どの変数をどう組み合わせるかでオリジナリティがあるんじゃないか？
- 「結合」はなぜ事後的な理解をするのにしか役立たないのか？なぜメカニズムにならないのか（2章で確認したい）
- サイエンスのアナロジーで見るとこの本もわかりやすい？（僕の理解が間違っていなければ…）  
⇒数学、もとい日常では可換/非可換性・配列って結構当たり前だけれど、社会科学では当たり前ではない？（コーヒー、色…）
- 理論とメカニズムの違いが曖昧？メカニズムを集合させると理論になるんじゃないか？